

談話室

アメリカ生活1年目

田村 潤*

The First Year of Life in America

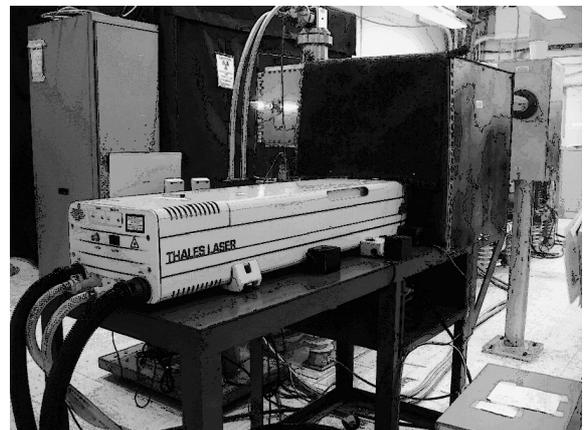
Jun TAMURA*

アメリカ合衆国ニューヨーク州サフォーク郡にあるブルックヘブン国立研究所 (Brookhaven National Laboratory, BNL) の Collider-Accelerator Department (C-AD) で3年間研究生生活を送る機会をいただき、2006年9月1日にジョン・F・ケネディ国際空港 (John F. Kennedy International Airport, JFK) に降り立ってから1年たちました。この間、レーザーイオン源のための重イオン生成実験を行ってきましたが、中でも、常温で気体の物質をレーザーイオン源のターゲットとして利用するため、冷凍機を用いてネオンガス等を固体化し、それをパルスレーザーで照射することによってプラズマを生成する実験を行いました¹⁾。実験室が日本からアメリカへ引っ越しするということで、最初は実験室の整備と実験装置の組み立てに追われました。あっという間の1年間でしたが、生活にもだいぶ慣れました。私のアメリカ生活1年目について紹介したいと思います。

BNLはロングアイランドというニューヨーク州南東部の島のほぼ中央に位置しています。LIE (Long Island Expressway) という高速道路がロングアイランドを東西に貫いており、Exit 68で降りてWilliam Floyd Parkwayを北に進めばBNLに到着です。ニューヨークの気候についての私の印象は「寒い」の一言につきまします。雪が降り始めるとすぐに一面真っ白になります。車のタイヤにチェーンをつけたりもしないため、まっすぐな道を走っていて車が一回転することもあり、積雪時には相当慎重に運転しなければなりません。外が吹雪で氷点下だとしても、建物の中は快適です。暖房が強すぎて暑と感じることもあります。寒さは夏にもあります。それは建物の中です。冷房が強すぎるため冬の服装で寒さをしのがなければなりません。環境問題に対する認識が低いと思わざるを得ま



English for Speakers of Other Languages at BNL (右端が私)



ビーム出射側をカーテンとアルミ板で覆われたレーザー

せん (ごみの分別もないようなものです)。

海外研究生生活では英語でのコミュニケーションが重要になってきますが、特に会話が多くの日本人にとっ

* 東京工業大学大学院総合理工学研究科創造エネルギー専攻博士後期課程
(E-mail: tamura.j.aa@m.titech.ac.jp)

てハードルになっているように思います。アメリカで初めてネイティブの英語を聞いたとき、今まで学校で勉強してきた英語が全く通用しないことを痛感しました。海外で生活していればいつの間にかペラペラになると思っていたのですが、全く違います。私のように何もしていないと、1年たっても自分の考えを相手に伝えることでさえ一苦勞です。英語を母国語としない多くの方がBNLを訪れるため、BNLにはEnglish for Speakers of Other Languages (ESL) という無料の英語クラスがあります。英語力向上のため、私もたまに出席しています。今ではこういった場所でこういったことを聞かれるのがわかってきたため、相手の英語を100%聞き取れなくても、話の内容を推測することができるようになってきました。普通に会話ができるようになるためには、本腰を入れて勉強しなければなりません。

アメリカでの食事は基本的にファーストフードです。牛丼を食べるためにはマンハッタンまで行かなければなりません。私の住んでいる町 Shirley には様々なファーストフードチェーン店がありますが、よくお世話になっているのが KFC です（日本ではほとんど食べることはありませんでした）。おいしくて値段も安いのですが、体に悪そうな油もたっぷりです。週に何食も KFC で食べることもあり、BNL の研究者から「ケンタッキーマン」と呼ばれたりもします。以外なことに店内では若者よりも年配の方をよく見かけます。食べる量、スピードともに完敗です。Shirley には他にも魅力的なファーストフード店がたくさんあり、安くておいしいのですが、やはり気になるのは体に及ぼす影響です。飲み物も日本のお茶はありません。とりあえずカロリーを抑えるためにダイエットコーラを飲むようにしてきましたが、この1年間で体重が5 kg 増えました。メニュー表のベジタブルのカテゴリーにフライドポテトやオニオンリングが入っている国で、日本で言われているような健康的な食生活を送るのはなかなか難しいです。

食生活はボロボロですが、日本にいたころよりも規則正しい生活を送ることができています。BNL ではほとんどの人が朝8時過ぎには出勤して、夕方5時くらいには帰ってしまいます。金曜日は、3時くらいから人が減り始めます。そのため、誰かに用事があるときには朝からお願いしておく必要があります。自然と朝からオフィスにるのが当たり前になってきます（もちろん、会議の前などはこれが乱れますが）。夕方以降オフィスに残っているのはほとんど日本人しかいません。何か趣味を見つけなければ、寝る前にビールを

飲むだけの単調な毎日になってしまうため、現在もアメリカで楽しめる娯楽探しを行っているのですが、なかなか見つかりません。アメリカで空手を習うのもおもしろいかなとは思ったりしています。

住居は、BNL 研究者 Anatoli Zelenski さん宅の地下部分に住まわせてもらっています。日本にはあまり地下室がありませんが、こちらでは多くの家には地下室があり、賃料も安くなっています。寝室には窓が一つもなく、部屋のドアを閉めると昼でも真っ暗です。窓がないという環境は精神的によくはないと思っていましたが、今のところ正気であると信じています。地下のメリットは夏涼しく冬暖かいということで、デメリットは高い湿度です。除湿器がなければ部屋がカビだらけになります。また大雨のときは地下が水浸しになったりします。アメリカでは湿度で苦勞することはなかったのですが、残念です。そして Anatoli さん宅の最大の特徴はトイレに紙を流せないということです。対処法として日本メーカーのウォッシュレットを設置しました。アメリカでウォッシュレット付きのトイレを他に見たことがありません。

最初の一か月はずっと実験を行うためのトレーニングを受けていました。大学でも放射線やレーザーの講習を受講しましたが、BNL でのトレーニングはその量をはるかに多く、ほとんどすべての講習には試験があります（ほとんどのトレーニングは Web 上で受講します）。これらをクリアしてやっと実験室に入ったり、実験装置を触ったりすることができます。研究所内における安全意識は日本よりも高いと思います。その後、レーザープラズマ生成のための実験装置の組み立てを行ったのですが、安全上、レーザービームの経路を覆って、実験室の全ての窓などを塞がなければなりませんでした。そのためアルミ板にネジ穴を開けたり、カーテンを切ったりという毎日が続きました。同級生が修士論文をもう書き終わったとか話しているとき、私はアルミ板を加工したり、はんだ付けを行ったりしていたので、落ち込んだりもしました。そんな時私を助けてくれたのが、冷えたビールとメキシカンフードでした。実験装置の組み立て等で何かを注文したときには、それがいつ届くのか予想できないため何度も担当者に問い合わせました。おかしな英語で何度も同じようなことを確認しに行ったので、少し煙たがられたような気もします。結局レーザーを打てるようになったのは年を越して1月初旬でした。修士論文の提出まであと1か月しかありませんでしたが、なんとか実験を行うことができてよかったです。実験開始のために多くの方々が自分の仕事を後回しにして協

力してくれました。これらの援助がなければ実験を開始することはできなかったと思います。BNLにおいて私の面倒を見てくださっている岡村昌宏さんが修士課程修了パーティを開いてくれたのですが、C-ADの同じ建物内の多くの方がお祝いに駆けつけてくれ、本当にうれしかったです。振り返ってみると、お世話になってばかりの1年間でした。これからのBNL生活では、助けてもらってばかりではなく、自分も何かの助けになりたいと思います。

2007年08月、久しぶりの日本ということで何かおいしいものを食べたいと思い岡村さんに相談しました。紹介してくれたのはネタの大きさが有名な成田のお寿司屋さんでした。「日本のことをもっとちゃんと

勉強しておかなければならない」などと都合のよい理由をでっちあげ、一人で寿司屋に入るという冒険をしました。話には聞いていましたが寿司は回っていませんでした。初めてのカウンター、「なるほど、これが回らない寿司か。うまい。お世話になっているBNL研究者の方たちに、日本のお寿司をごちそうしたい。」と思いました。

久しぶりの日本、指導教官の服部俊幸先生と乾杯しよう。

参考文献

- 1) J. Tamura, M. Okamura, T. Kanesue and S. Kondrashev, *Appl. Phys. Lett.* **91**, 041504 (2007)